

言葉を探す、心を探す 佐藤敏郎

何もかも流された町でスタートした新学期。この前まであった建物が跡形もない。笑って声を交わした人も、いない。教師は生徒を励ます仕事なのだが、「頑張れ」なんてとても言えない日々が続いていた。「希望」とか「絆」といった言葉を耳にすることが多かったけれど、そこに生徒たちを、自分自身を、どう向かわせればいいのか。

そんな五月、生徒たちに俳句を作らせようという提案があり、国語科の私が授業を担当することになった。町はまだ瓦礫に埋もれ、家族を亡くした生徒もいる。「素直な気持ちを五七五に」と言われたが、そんなことをしていいのかと、直前まで大いに迷った。

不安は的中しなかった。生徒は、私の説明が終わるやいなや、指を折りながら五・七・五の言葉を紡ぎ始めた。まるで魔法がかかったかのように・・・。

どんなことを書いているのだろうと机をのぞくと、こんな句が目飛び込んできた。

見上げれば がれきの上に こいのぼり

瓦礫だらけの町で、下ばかりむいてちやダメだと思っ
て顔を上げたら、壊れた建物の上に、誰かがあげた鯉のぼりが泳いでいたという句である。解説も写真もない、たった十七音の文字を並べただけなのに。津波の威力、悲しみ、無力感、希望、・・・すべて伝わってくる。

・・・・・・・・中略・・・・・・・・

あの授業で、悲しみに向き合う大切さを教えられたのは、私自身だったんだと、最近になって気づいた。(以下略)

・・・・RIEPI LETTER 2015.1・・・・

『小さな命の意味を考える会』

楽しく学び、遊んでいた、大好きな大川小学校でたくさんの子どもが犠牲になりました。あの日から私たちはずっと考えています。子どもたちの小さな命が問いかけているものはなんだろうと。遺族はもちろん、関心を持つている方すべて市教委や検証委員会のみなさんもずっと考えているのだと思います。小さな命の問いかける意味は、深く、重い。それに向き合いたいと思います。何をいつまで、と思うかもしれません。その通りです。時間はどんどん過ぎていくのですから。警報が鳴り響く寒い校庭で、子どもたちは危険を察し逃げたがっついていて、それでも先生を信じて、指示をじつと待っていました。その事実から目を背けてはいけないと思います。あの日の校庭に目を凝らすことで、何か大切なことが見えてくるはず。悲しみは消えることはありません。でも、この悲しみはあの子たちの存在そのものです。忘れる必要も、乗り越える必要もなく、いつもそばに感じていいのだと思います。あの日の校庭もそうでした。多くの人が、このままではいけないと感じています。誰かが「そっちへ行くな」と声をあげなければ。津波が来てからでは遅いのです。そう考え、このタイミングで会を作りました。(2013.11.30)

..... <http://311chiisanainochi.org>



神田瑞季さんの描いた「生きる」



《会場の地図はこちら》

参加申し込み 3.11 から6年 “みんなのこと”、忘れないよ FAX 022-218-3663

4/22(土) あの日を語る、未来を語る

お名前 _____

参加人数 _____ 名

ご住所 〒 _____

電話 _____

切り離さずそのままファックス送信してください

ご記入の情報は参加者把握のためにのみ使用します